第５課　アブラハムの信仰

【暗唱聖句】

「それでは、わたしたちは信仰によって、律法を無にするのか。決してそうではない。むしろ、律法を確立するのです」ローマ3:31

【今週のテーマ】

アブラハムが信仰により、神の恵みによって義とされたのなら、わたしたちも同様の方法で義とされます。

【日曜日・律法】

「それでは、わたしたちは信仰によって、律法を無にするのか。決してそうではない。むしろ、律法を確立するのです」ローマ3:31

信仰よって義とされるのなら、律法は無になるのかといえば、もちろんそのようなことはありません。「無にする」というギリシャ語は「カタルゲオー」は「役に立たなくする」「無効にする」という意味の言葉ですが、決してそのようなことはないとパウロは断言しています。そればかりか、逆に信仰によって律法を確立するのであるとパウロは語っています。

信仰の驚くべき力は、神様から義と認められる恵みをいただくことができるだけでなく、信仰によって律法を守り行う力も与えられるということです。義とされる正しい信仰がある人は、律法は無となったとは決して思いません。律法は愛を反映しているわけですから、それは信仰者の喜びであり、行いの指針となるべきものとして、必ず導かれるのです。

十戒を中心とする律法が与えられたのは、神がイスラエルの民をエジプトでの奴隷状態から解放し、救いを与えて下さった後でした。つまり律法は、それを守ることによって自分の力で救いを獲得するためではなくて、神によって救いを与えられた民が、その恵みに感謝して、神の民として神に従って生きていくために与えられたのです。

【月曜日・当然支払われるべきものか、恵みか】

「同じようにダビデも、行いによらずに神から義と認められた人の幸いを、次のようにたたえています。「不法が赦され、罪を覆い隠された人々は、幸いである。主から罪があると見なされない人は、幸いである。」ローマ4:6～8

行いによって義とされ、救われるとしたら、人は自分の行いを誇り、自分を神のように考えるようになるか、あるいはいつまでも救われている確信がなく、不安におびえることでしょう。しかし、神の恵みによって義とされるなら、私たちは神を誇り、その恵みに対して感謝と喜びがあふれることでしょう。パウロは旧約聖書のダビデを実例に出して、そのことを語っています。ダビデは王という権力を使って、大きな罪を犯しました。本当にひどいことをしました。しかし、そのことを悔い改めたとき、主から赦しが与えられ、罪なきものとして幸いを得ました。決して良い行いをしたわけではありません。ただ主のみ前にへりくだったとき、その罪が覆い隠されたのです。

「アブラハムは、割礼を受ける前に信仰によって義とされた証しとして、割礼の印を受けたのです」ローマ4:11

行いの象徴である割礼なしに義とされないという主張に対して、アブラハムは割礼を受けていないにも関わらず義とされました。そして、義とされたことの証として、子どもに割礼を授けることになりました。この実例を見ても、行いによって人が義になるのではないことがわかります。

【火曜日・約束】

「神はアブラハムやその子孫に世界を受け継がせることを約束されたが、その約束は、律法に基づいてではなく、信仰による義に基づいてなされたのです」ローマ4:13

パウロは「約束」と「律法」を対比し、信仰によって義とされることを旧約聖書から裏付け、構築しようとします。旧約聖書の人物の中でもユダヤ人にとって最も影響力の大きいアブラハムを取り上げ、世を受け継がせるという約束が、律法に基づいてではなく、信仰による義に基づいてなされたのだとはっきり言及します。そもそもアブラハムが義とされたとき律法はまだ与えられていなかったのです。

「律法に頼る者が世界を受け継ぐのであれば、信仰はもはや無意味であり、約束は廃止されたことになります」 ローマ4:14

パウロの言うとおり、もし律法に頼る者が救われ、世界を受け継ぐのであれば、信仰はもはや意味を失ってしまいます。信じることが何の意味ももたないとするならば、この一寸先もわからないような不確かな世界で、わたしたちはどう生きれば良いのでしょうか。神様を信じ、すがっていかなければ救われないような世界において、それが意味を持たないとすれば、人々は大きな不安に捕らえられ、救われた喜びに生きるものは一人もいなくなってしまうことでしょう。

「実に、律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違犯もありません」ローマ4:15

律法は神様のご品性の表れであり、愛の教えであるがゆえに素晴らしいものですが、同時にそれを完全に守れないものを罪に定めるものでもあります。だから、律法を愛しながらも、わたしたちは苦しむのです。

「従って、信仰によってこそ世界を受け継ぐ者となるのです。恵みによって、アブラハムのすべての子孫、つまり、単に律法に頼る者だけでなく、彼の信仰に従う者も、確実に約束にあずかれるのです。彼はわたしたちすべての父です。「わたしはあなたを多くの民の父と定めた」と書いてあるとおりです。死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる神を、アブラハムは信じ、その御前でわたしたちの父となったのです」

ローマ4:16、17

再びパウロは、信仰によってこそ、世界を受け継ぐ者となることを繰り返し、律法がまだ与えられてはおらず、また信仰の父と言われたアブラハムにまで実例をさかのぼり、アブラハムが何を信じて義とされたのかを思い出させようとしています。アブラハムが信じたのは、「死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる神様」でした。これはイサクを捧げようとしたとき、アブラハムは神様が必ずイサクを復活させてくださると信じていたということです。わたしたちも同様に、わたしたちを命へと復活させてくださる神様を信じるとき、アブラハムの祝福を受け継ぎ、新しい世界が開かれるのです。

【水曜日・律法と信仰】

エレン・G・ホワイトは「人が自らのわざによって自分自身を救うことができるという原則を信じるところではどこでも、人は罪に対する防壁がない」と言っています。罪に対する防壁とはイエス・キリストのことです。つまり、人が自らのわざによって自分自身を救おうとするなら、イエス・キリストは全くわたしたちの罪の問題に対して関与されなくなるということです。これは考えただけでも恐ろしいことです。

自らの業によって自らを救うことを教える宗教は少なくありません。もし命を授けることができる律法があるとすれば、それは確かに聖書の神様の律法ということになります。律法をすべて守ることができれば永遠の命の扉が開かれることでしょう。これは驚くべきことです。しかし、残念なことにわたしたちは誰も、神様が要求するレベルにおいて、律法を守り切ることができません。その結果、律法はただわたしたちに罪を指摘するばかりとなるのです。だから、わたしたちはキリストの罪に対する防壁を失うようなことがあってはいけないのです。信仰によってキリストの贖いの恵みの中に生きることが何よりも大切なのです。

【木曜日・律法と法】

律法が与えられることによって、わたしたちは何が罪であるかはっきりと規定されることになりました。もし、この律法が廃され、罪の規定がなくなったとすれば、人間は何から救われる必要があるのでしょうか。これは理論上おかしな話になってしまいます。律法は廃されたという表現は、律法が持っている力、すなわち罪とその結果の滅びが、主を信じるものには及ばなくなったということで、律法そのものがなくなったわけではないのです。それはイエス様が一身に罪の結果を負ってくださったからです。

では、いまどのような形で律法を見つめる必要があるのでしょうか。わたしたちはそこに神の愛を見るのです。そして、わたしたちが目指す正しい生き方の指針として見つめるのです。ただ、常にイエス様と共に見つめることが重要です。自分ひとりで律法の前に立ってはなりません。